

タイの教育現場支援としての JF 日本語教育スタンダード導入 －『あきこと友だち Can-do ハンドブック』の作成－

渋谷実希

〔キーワード〕 JF 日本語教育スタンダード、Can-do、口頭コミュニケーション能力、タイ国
中等教育支援、『あきこと友だち』

〔要 旨〕

本稿は、国際交流基金バンコク日本文化センターが2010年1月より2012年4月にかけて行ったJF日本語教育スタンダード導入施行の変遷とともに、具体的な作業の流れと作成物の内容を報告するものである。

導入にあたり我々は、JF日本語教育スタンダードを、タイの中等教育機関の日本語教育の現場で問題となっている課題解決のために利用するという基本方針を立てた。そして、『あきこと友だち』という既存の教科書を使っての口頭コミュニケーション能力育成を目標に掲げた。その実現のため、Can-doでの目標設定、目標を達成するためのクラス活動、できたかどうかの評価という一連の流れにJF日本語教育スタンダードを取り入れた、教師のための参考書を作成した。また完成後は、タイ全国6か所で、これをどのように活用していくかの実践的な研修会を行った。

現場に直接役立つ、教育支援のためのJFスタンダードの活用法として報告したい。

1. はじめに

報告者は、派遣先である国際交流基金バンコク日本文化センター（以下「JFBKK」）において、JF日本語教育スタンダード導入施行の主担当となった。本稿は、2010年1月より2012年4月にかけて行った導入の変遷とともに、具体的な作業の流れと作成物の内容を報告するものである。

2. JF 日本語教育スタンダード導入施行の流れ

2005年に「日本語教育スタンダードの構築をめざす国際ラウンドテーブル」が開かれてから、様々な拠点でJF日本語教育スタンダード（以下、「JFスタンダード」）を導入した講座の取り組みが行われてきたが、そのいずれも基金が主催する講座に限られたものであった⁽¹⁾。今回JFBKKは、広くタイの日本語教育の現場に活用させることを目標に導入を試みた。

2.1 基本方針

JFBKK は近年主にタイの中等教育段階⁽²⁾の日本語教育支援を活動の中心としている。そこで、JF スタンドアードの導入にあたっては、次の通り基本方針を決めた。

基本方針1：タイの一般的な中等学校の教育現場で活用できる、現実的な事例を目指す。抽象的で難しいものではなく、現場の教師がすぐに利用できる具体的な成果物を提供する。

基本方針2：JFBKK 開発教材『あきこと友だち』⁽³⁾をメインの教材として使用している現場への導入とする。あらたに教材を加えると教師の負担が増えるため、すでに中等教育機関の多くで使用されている教科書をベースにする。これにより、JF スタンドアードの普及も広く狙えると考えた。

以上の通り、我々の方針としては、この導入施行はあくまでも中等学校支援のための一事業であり、一方的に JF スタンドアードの活用を促すものではない。また何より、タイの中等学校の日本語教育の現場で問題となっている課題解決のために、JF スタンドアードを利用するという姿勢で取り組むことにした。

2.2 タイの中等教育機関における日本語教育の課題

タイの中等教育機関の日本語教育においてあげられる問題点としては、教員の不足、学習者の日本語学習への動機づけの希薄さ、大学入試での日本語の位置づけなど、教育システムや環境による問題と、コースに合った教材の不足や教師自身の日本語のブラッシュアップなどクラス運営に関わる問題⁽⁴⁾とが考えられる。このうち、JFBKK が直接的に形となる支援ができるのは後者である。そこで今回は、これまで中等教育機関の日本語非母語話者教師(以下「NNT」)との話し合いや研修内容の希望調査などから課題を探し、その解決につながる取り組みを行っていくことを考えた。

2.3 導入方法の変遷

上記の方針を重視した結果、導入の方法は、次のような変遷をたどることとなった。

2.3.1 口頭コミュニケーション能力評価ツールの開発

初めに取りかかったのは、Can-do で設定された口頭でのコミュニケーションの目標(詳細は後述)を学習者が達成できたかどうかを NNT が測るための評価ツールの開発である。

口頭コミュニケーション能力を目標としたのは、タイの学習者にとって苦手な技能であるが、同時に教師が伸ばしたいと感じている部分だからである。またこれまで、口頭試験は NNT にとって難しい部分が多く、ほとんど行われてこなかったのが実状である。そこで、NNT が気負わずに口頭でのパフォーマンステストを実施し、自信を持って Can-do が評価できるツール

を開発すれば有益だろうと考えた。目標設定と評価は切り離せない項目であるし、成績評価は教師にとって非常に重要な課題である。2010年6月からこの開発を進め、高校数か所に協力を依頼し、テストを実施した。しかし、当然のことであるが、やはり普段から話すことを教えていないクラスでは、学習者は話すこともやりとりもできないという結果になった。

ここで、支援の方法をあらためて考え直すこととなった。Can-do と評価のツールだけを作って渡したとしても、その目標に向かって授業をしていなければ当然ながら目標は達成できないし、評価にもつながらない。つまり、どうしたら JFL の環境で、NNT が口頭コミュニケーション能力を育てられるのか、そのサポートを充実させていく必要があるのだとわかった。実際我々が NNT106名に調査をした結果⁽⁵⁾でも、103人が「口頭コミュニケーション能力の育成が非常に重要」と答えており、その教え方に興味を持っているが、「どうしたら NNT が口頭コミュニケーション能力を伸ばす授業ができるのかわからない」「知識を運用につなげるにはどうしたらいいのだろう」という声も多くあがった。

2.3.2 『あきこと友だち Can-do ハンドブック』の作成

2.3.1で述べた通り、JFL の環境で NNT が口頭コミュニケーション能力を育成するためには、クラス内での活動を充実させる必要がある。そこで、『あきこと友だち』を使ってどのように授業を進めれば Can-do 達成につながるか、また評価できるか、といったアイデアや提案を集めた参考書を作成することにした。それが『あきこと友だち Can-do ハンドブック』である。報告者が日本語で執筆した日本語版と、それを全てタイ語に翻訳したタイ語版を作成することにした。

2.3.3 ワークショップの実施

ハンドブックを作成することが決まったが、渡すだけでは、結局一方的になってしまう。そこで、使い方のワークショップを開き、NNT が学校へ戻り一人になっても自分でできるという安心感を持つことが必要だと考えた。2011年10月からバンコクでのセミナーを皮切りに、タイ全国6か所でワークショップセミナーを開くことにした。以上が、支援のための導入の流れである。

3. 『あきこと友だち Can-do ハンドブック』の作成

ハンドブック作成の作業過程および内容を以下に述べる。

3.1 「Can-do」の記述作業

タイの中等学校の学習者たちが口頭でできるようになる目標は何か。まず Can-do を作成し、目標を明確にする作業を行った。

3.1.1 レベルの選定

まず、CEFR の Can-do Statement と照らし合わせたレベル選定を行った⁶⁾。

タイ中等教育機関に派遣されている専門家2名、JF バンコクセンター新規研修担当教師2名の教授経験から、1つの巻を終えると CEFR のレベルでおよそどのくらいのこと出来るようになるか全て列挙し、それらを照らし合わせる作業を行った。全6巻で、およそ A2.2 レベル程度を目標にしているということで一致した。A2 レベルは元から2段階に分けられているが、A1 レベル内でも差があるため、更に3段階に分けることにした。

表1 『あきこと友だち』 CEFR 対応レベル

レベル	巻	話題・場面	対象	ディスコース能力 (一貫性・結束性)	活動
A1.1	1巻	自分自身や身近な人、場所について	簡単な表現や文	単純な字句を並べて述べることができる	今現在での応答・サバイバルができる
A1.2	2巻				
A1.3	3巻				
A2.1	4巻	人物の生活、日課、好き嫌いなどについて	単純な記述やプレゼンテーション	簡単な言葉で述べる ことができる	自分の情報や要求を相手に伝えることができる
A2.2	5巻 6巻	自分の毎日の生活に直接関連のある話題について／個人の内面や社会一般の事柄	短い、練習済みのプレゼンテーション	事柄を列挙して、簡単に述べる ことができる	相手との情報交換・相手への働きかけ・相手によって言葉を使い分ける

A1 から A2 のレベル分け (3巻と4巻) については、教師の経験値から、学習者の日本語の力が上がると感じられる巻で線引きを行った。例えば、「学習した語彙や言い回しのレパートリーが増え、それを駆使してコミュニケーションが何とかとれるのが4巻ぐらいから」という意見や、「扱う話題が、自分のことから周囲のことへと広がる」などの理由からである。

3.1.2 My Can-do の記述

もともと『あきこと友だち』には、簡単な目標設定が書かれていたが、記述が大まかであったため、CEFR の Can-do Statement や JF Can-do に基づいて記述を細かく設定することにした。教科書は、書く、読む、聞く、話す4技能を伸ばすように作られているが、ハンドブックでは、特に話すことを目標に、口頭での表現ややりとりのみに絞った Can-do を作った。

『あきこと友だち』を知らない教師でもイメージできるような記述を目指し、日本語レベル (文の構造、使用する表現、スピードややりとりの相手の話し方の条件など)、トピック、場面などを加えた。そして完成した My Can-do を「あきこ Can-do」と呼ぶことにした。『あきこと友だち』各課と各巻にそれぞれ Can-do を作り、タイの高校生が、学校、日常生活の場面

において、日本人教師や日本人の友だち、学校に来た日本人などに対して、表現ややりとりなど、学習した日本語を使って口頭でできるようになることを目標を記述した。

表2 『あきこと友だち』の目標とあきこ Can-do の例

課	教科書の目標	あきこ Can-do
2課	場面に応じて自己紹介ができる	パーティなどで初めて会った人に、自分の名前や国籍、学年など、非常に基本的な表現を使って自己紹介と挨拶ができる。また、会った人に自分の知り合いを紹介できる。
11課	指示や依頼ができる	学校の場面で、ゆっくりと分かるように話してもらえば、先生や友だちからの短い簡単な指示や依頼が理解できる。
	依頼を受けたり断ったりできる	基本的な表現を使って、物の貸し借りなど簡単な依頼をすることができる。また基本的で決まった表現を使って依頼を受けたり、理由を言って断ることができる。
23課	規則について質問したり答えたりすることができる	学校の規則について、簡単な表現で質問をしたり答えたりできる。
	許可を求めることができる	学校生活の中で、先生や友人などに簡単な表現で許可を求めることができる。また、許可を求められたら簡単な表現で答えることができる。

この作業過程で難しかったのは、スタンダードとしての汎用性を保ちつつ、『あきこと友だち』に合った My Can-do の具体性をどこまで持たせるかという点である。抽象的すぎると実践的ではないし、反対に教材に特化しすぎると JF スタンダードから離れてしまう恐れがあった。また、タイ語に翻訳した場合のニュアンスについても、翻訳者との間で細かい調整が必要であった。

3.2 ハンドブックの内容

3.2.1 全体の構成

『あきこと友だち Can-do ハンドブック』は、口頭コミュニケーション能力の育成を目指した日本語クラスのための教師用参考書であり、目標－授業－評価の流れに一貫して JF スタンダードの考え方を取り入れている。全体の構成としては、

第1章：目標(「あきこ Can-do」)

第2章：授業の進め方の提案

第3章：タスク活動と評価

第4章：プラスの活動

となっている。以下に各章の構成及び内容を記す。

3.2.2 各章の内容

第1章：目標

この章は、JFスタンダードが口頭コミュニケーション能力育成に役立つことを理解するための重要な部分である。そこで、まずハンドブック全体の核となるJFスタンダードの考え方の解説、および「あきこ Can-do」リストを記載した。そして、その利用のしかたとして、これまで文法や語彙の知識を増やすこと、正確に覚えることに偏りがちだったNNTの授業の目標にCan-doをプラスする提案を行った。つまり、具体的な場面や状況を設定し、最終到達目標を提示することで、学習した知識を運用、やりとりにつなげる狙いである。JFLの環境では日本語使用場面が少ないため、遭遇した場面に学習した知識を応用させるよりは、学習項目と使用場면을提示した方が実践的である。また、学習者自身もこの課が終わると何ができるようになるかが明確になり、学習の楽しさや目標が感じられるというメリットもある。

第2章：授業の進め方の提案

この章では、「あきこ Can-do」の達成を目指した授業での工夫やアイデアなどについて提案している。タイのNNTの授業では、ドリル練習を口頭ではなく書かせて行ったり、教師から一方的に全て母語で説明して終わりにしてしまうことも多い。そこで、学習者が自分からルールを発見していくような導入方法や、なるべく口をたくさん動かす基本練習のやり方などについて詳しく紹介した。また、中等教育段階の学習者には、異文化への興味や、外国語学習が楽しいというモチベーションを持たせることが重要だと考え、アクティビティやゲームなど、クラスが楽しくなりそうなアイデアも提供した。

前半では、初級全体に共通して使えるような考え方や工夫の提案、後半では『あきこと友だち』2課～10課の、導入から応用練習までの教案を掲載した。教案に関しては、「この通りに授業をしなければいけない」という誤解を与えてしまう懸念があり、提供するかどうか悩んだが、「忙しい教師がそのまま使える」、「見よう見まねでも安心して授業が進められる」具体的に細かい設計の方が現場の先生が使いやすいということから、教案例を掲載することにした。

第3章：タスク活動と評価

「あきこ Can-do」の達成を測るための評価活動の提案、および学習者同士あるいはノンネイティブ教師が評価をするときに使用する「評価シート」の案を提供している。この章で目指した点は、以下の通りである。

- ① Can-doを測れるようにする。
- ② NNTが使いやすいものにする。
- ③ 評価をすることで、学習者のコミュニケーションへの意識や学習へのモチベーションを高め

る。

そこで、次のような工夫をした。

(1) 『あきこと友だち』練習の利用：Can-do が達成できたかどうかを測るタスクとして『あきこと友だち』の各課に載っているまとめの練習問題を利用することを考えた。ロールプレイやインタビュー、Show&Tell など形式は様々だが、その課で学習したことを使ってある課題を達成する目的で作られている。そこで、この練習をベースにクラスで活動しながら、同時に評価することを考えた。そうすれば、わざわざテストの時間を設けることも、問題を考える時間も省ける。

以下に、例として『あきこと友だち』21課の練習を引用する。

例1) 21課 練習6.2

本物が絵を友達に見せながら（説明のパターンを使って）自分の宝物を説明してください。

「わたしのたからもの」説明のパターン：

これはわたしのたからものです。

_____（いつ）_____、_____（V+N）_____です。詳しい説明。

尚、この課の Can-do は、「自分が作った物や思い出の品などについて、そのエピソードを簡単な文を並べて説明することができる。」となっている。そこで、自分の思い出のものや自慢したいものなど、私物を持って来て、クラスの前で発表するプレゼンテーション形式のタスクを行うことにした。流れとしては、1週目にまず学習者がテキストの説明パターンを参考に自分の宝物についての作文を書き、それを教師が回収しチェック、フィードバックを行う。その後学習者は各自発表に向けての練習を行い、次の授業の時に宝物を持参して発表するという手順である。

(2) 教師用評価シート（例2参照）：教師用に、次のような観点と内容を取り入れた評価シートを作成した。①該当レベルの日本語でタスクが達成できたかどうかを評価する。全ての項目で2以上にチェックがつけばこの課の can-do 達成とする。②ルーブリックを使った評価にする。③学習者へのアドバイスやコメントも入れる。④NNT 教師が簡単に評価できるよう、3段階評価にする。尚このシート以外に、活動への取り組みや意欲、発表のしかたを評価するシートもある⁷⁾。

(3) 学習者用相互評価シート：特に中学生や高校生の世代にとって、友だちからの評価というのは非常に重要な意味を持つ。そこで、発表を聞きながら残りのクラスメートが書き込み、発表後にその生徒に渡す相互評価を取り入れることにした。これにより、次のような効果を期待している。

①友だちが聞いているということで、発表する側は頑張って話す気持ちになる。聞く側も、し

っかりスピーチを聞く態度を養うことにつながる。

②評価をしたり、アドバイスをすることで、スピーカーの良い点を学んだり、相手に伝える口頭コミュニケーションのためには、どんなことが大切なのか、その観点を養う。

③友だち同士でいい所を認め、もっと良くなるためのアドバイスもして、互いに育っていく。

尚、本稿では、Show & Tell 形式のタスク及び評価シートを紹介したが、ハンドブックでは他の形式についても評価活動の提案を行っている^⑧。

例2) 教師用評価シート

評価項目	項目	1 もうすこしがんばって	2 できました	3 よくできました
発表の内容	評価	<input type="checkbox"/> 宝物が何か、どうい うものか、どうして大切か などについて説明できてい なかった。	<input type="checkbox"/> 宝物が何か、どうい うものか、どうして大切か などについて説明していた。	<input type="checkbox"/> 宝物についての説明を、 具体的な例やエピソードな ども交えながら話せていた。
	コメント	残念ながらよく分かりませ んでした。もっと練習して、 またがんばってください。	あなたの宝物についてよく 分かりました。紹介してく れてありがとう。	とても興味を持てる内容で した。自分のことをきちん と表現できました。
発音	評価	<input type="checkbox"/> 聞きにくい発音がたく さんあって、理解ができな かった。	<input type="checkbox"/> 聞きにくい発音が少し あったが、理解はできた。	<input type="checkbox"/> 全体を通して、とても 聞きやすい、きれいな発音 で話せていた。
	コメント	CDを聞いたり、声に出し て練習しよう！	苦手な発音を練習すると、 さらによくなりますよ！	とてもいいです。この調子 でいきましょう！
文のレベル	評価	<input type="checkbox"/> 単語レベルでしか話す ことができない。間違いが 多く、学習した語彙や構文 が使えない。	<input type="checkbox"/> 文で話すことができる。 少し間違いがあるが、この 課で学習した語彙や構文を 使うことができる。	<input type="checkbox"/> 接続詞、語彙、表現な どがバラエティに富み、少 し複雑な構文なども、ほぼ 正しく使うことができる。
	コメント	の ところをもう一度復習し ましょう！	勉強したことがよく身につ いています。これからもこ の調子で頑張ってください！	自分から率先して勉強して いますね！日本語の使い 方がよく分かっています。



◆目標達成チェック（全ての項目で2以上にチェックがついた場合）：

- 自分が作った物や思い出の品などについて、そのエピソードを簡単な文を並べて説明することができた。

第4章：プラスの活動

学んだ日本語を使ってタスクを達成するための、総合的な活動案。プロジェクトワークやプレゼンテーションなど、テキストや学年のまとめとして使う活動の具体案を載せている。

以上、ハンドブックの構成及び内容について簡単に紹介した。

4. 導入施行の振り返りと今後の課題

以下に、今回の導入施行についてのまとめを述べる。

4.1 導入の振り返り

今回の導入では、タイの教育現場に役立つ、支援としての JF スタンダードのあり方を探ることから始まり、実際の使用につなげるまでの全ての工程を経、非常に学ぶことが大きかった。

本施行では、開始当初予定していた作成物と、完成したハンドブックとでは、形式も狙いも大きく違うものになった。これは、導入を進める中で、現場のニーズと課題を追及したときに、設定していた理想とは違うことに気づいたためである。我々に、いかに勧めるものがあったとしても、それを一方的に押し付けるのではなく、現場がどのような状況・段階にあり、何を求めているのかを確認し、できるだけそれに沿うことが必要だと感じた。

4.2 成果

(1) ハンドブック発行部数：タイ語版500部＋日本語版200部は全て配布終了。2012年8月現在、『あきこと友だち』の出版社であるタイの紀伊國屋書店が増刷、希望者に配布している。

(2) ワークショップ参加者数：約270名。

(3) フォローアップ調査の結果、ハンドブックを利用しているという12名にアンケートを行った。

質問1：ハンドブックのどの項目を使用しましたか。（ ）内は人数を表す。

①目標設定に Can-do を使用 (9)	④応用練習 (3)
②新しい学習項目の導入 (7)	⑤アクティビティ (4)
③基本のドリル練習 (9)	⑥評価 (4)

応用練習、アクティビティ、評価については実践した人数が少なかった。授業時間の制限や学習者のレベルなどから、行うことがなかなか難しい状況だと考えられる。目標設定、ドリル練習に関しては、どの課でもある程度共通して行えることが多いため、取り入れやすい項目かもしれない。しかしワークショップではドリル練習を苦手としていた教師も多かったため、この数字は大きな成果と言える。

質問2：使ってからの変化について、気づいたことがあれば書いてください。

学習者の様子	教師自身
・口頭コミュニケーションへの興味が高くなった。 ・積極的に授業や活動に参加したり、日本語を使うようになった。	・自分の導入のしかたが面白くなった。 ・授業準備の負担が減った。 ・Can-do を意識するようになった。

・話したがるようになった。楽しく会話できる。
 ・その日の学習の達成目標や達成度がわかるようになった。

・評価しやすくなった。

質問3：ハンドブックを使った感想や要望などについて聞かせてください。

・目標や進め方のアイデアが役に立つ。 ・紹介されている活動は実際に使える。
 ・学生の興味をひけるし、教えるヒントになる。 ・役に立つ情報が全部そろっている。
 ・3巻目以降も続けて作成してほしい。

質問2、3に寄せられた回答からは、ハンドブックがタイのNNTの口頭コミュニケーション能力育成に対する関心を掘り起し、実践へつなげるきっかけになったことが窺えた。JFスタンダード理解への直接的な反応ではないが、普段の授業で実践し、結果的にJFスタンダードの考えを取り入れていた、という使い方から始めることも可能であると思う。

(4) 報告者自身が感じる成果：口頭コミュニケーション能力は大切である、育てようとする考えは別段新しいものではないが、NNTにとってはやはり難しく、敬遠しがちなものである。そこを、できるかもしれない、ちょっとやってみようと思えるきっかけ作りができたのではないかと思う。そして学習者の「日本語を話せた」という喜びの表情が窺えたことは、何より大きな成果である。次に、既に使い慣れている教科書である『あきこと友だち』を使った目標の立て方、教え方、学び方、評価のしかたへの新しい切り口ができたことである。話すことを目標にするなら、話すことを教える必要があり、できたかどうか判断し、次の学習や授業につなげていくという、クラス運営の一貫性の大切さを再確認することになったのではないだろうか。「JF日本語教育スタンダードは、日本語の教え方、学び方、そして学習成果の評価のし方を考えるためのツールである」⁹⁾と紹介されているが、まさにこのツールとしての使い方ができたと思う。

4.3 今後の課題

(1) 今回、タイの現場ではこのように活用する方法を考えたが、まだ教師自身がJFスタンダードを効果的に活用できているわけではない。我々のように間に立つ立場の者がより理解を深め、それぞれの現場に合った具体的な形にして提供していくことが必要であろう。また、今後JFスタンダードが世界で共通に真のスタンダードとして使われていくためには、テストと結びついたり、レベルの判定方法が明確にされるなど、見えやすい形として普及していくことも必要だと感じる。

(2) せっかく育成した口頭コミュニケーション能力でも、実際にそれを使える場やチャンス

がないことが海外での日本語学習の問題でもある。学習者が日本語を学ぶモチベーションを高めるためにも、何らかの形で彼らの能力を発揮する場や機会の提供を考えていくことが大切だと考える。具体的な案を挙げると、ハンドブック第4章で提案した「自分の町や学校を日本人に紹介するビデオを作る」というアクティビティをもとに、タイの中等教育機関にビデオの投稿を募り、それらの作品をウェブサイトで公開する、あるいはコンテストにするなどの活動を考えている。一方向ではあるが、自分たちの情報を伝える相手を想定することで、日本語を学び、使うモチベーションを高めることができるのではないだろうか。

(3) ワークショップで評価の実践を行った際には、NNT も短時間で Can-do の評価を行うことができ、ほぼ一定の結果が得られた。しかしやはり NNT と NT (日本語母語話者教師) では、評価の基準が異なる部分 (特に音声面) も見られた。また課が進み、日本語の熟達度が上がった際にどのように NNT の評価を可能にするかという課題も残っている。評価の信頼性、利便性を高めるためには、さらに研究を継続する必要があると感じている。

以上、タイの教育現場支援としての JF スタンダード導入施行について報告した。この取り組みを通し、教師の日々の努力と学習者を思う気持ちがタイの日本語教育を支え育てていることをあらためて感じた。現場の声を直接聞き、少しでも役立つ具体的な支援をしていくことが我々の役目である。

謝辞：『あきこと友だち Can-do ハンドブック』作成にあたり、多くの方のご協力を頂きました。この場を借りて、心から感謝の気持ちをお伝え致します。

〔注〕

^①2010年1月の時点。

^②タイの中等教育は、日本の中等学校にあたる3年間と、高等学校にあたる3年間で併せた6年間で、主に一貫教育で行われている。

^③タイ中等教育機関の日本語専攻コースで学ぶ学習者を対象に、2004年に国際交流基金バンコク日本文化センターが開発した。全6巻、30課で構成されている。

^④国際交流基金 2011年度 日本語教育国・地域別情報

<http://www.jpff.go.jp/japanese/survey/country/2011/thailand.html#KANKYO><2012年7月22日参照>

^⑤2010年10月実施。

^⑥作業当時は、公開されている JF スタンダードの A1、A2 レベルの Can-do 記述がほとんどなかったため、CEFR を参考にした。

^⑦紙幅の関係上、その他の評価活動や評価シートの掲載は割愛した。

^⑧国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード2010』

〔参考文献〕

国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード2010』

国際交流基金 (2010) 『JF 日本語教育スタンダード2010利用者ガイドブック』

森本由佳子 (2011) 「JF 日本語教育スタンダード—Can-doの可能性—」『日本語教育紀要』第8号、国際交流基金バンコク日本文化センター

Council of Europe (2001) *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press